

認知言語学とドイツ語教育

大藪正彦

【概要】

認知言語学は、80年代頃から次第にまとまった形で言語研究の一つの流れを形成してきた。まとまった「学派」を形成しているというよりは、言語にどのようにアプローチするかということに関して、共通のコンセンサスが持たれていると考えるべきであろう。その言語への取り組み方の基本姿勢をひとこと言えば、「人間の認知の営みに動機づけられた言語」という認識である。つまり、「ひと」と切り離して「ことば」を考えるのではなく、「認知」という営みを介して「ひと」と深く関わるものとして「ことば」を捉えようとする。本発表では、認知言語学研究の現状や動向を紹介しつつ、下に挙げたようなキーワードを軸に、そのアプローチの仕方を紹介する。さらに時間の許す限りにおいて、日独対照をテーマとした事例研究の報告を行いたい。

また、認知言語学が言語教育に貢献できる可能性も注目に値する。認知言語学は言語のあり方をただ「記述」するのではなく、言語を使う人間の認知の営みとの関連で「説明」しようとする。人間の認知の営みには、文化の違いを越えて、基本的な方向での共通性があるはずであり、あることを人間が処理する場合、複数の選択肢があるにしても、無数の選択肢があるということにはならない。このことを、個々の言語表現のレベルで考えてみると、異なった表現の仕方を探る言語であっても、どの選択肢も人間の認知の営みとして許容されるものであるから、それぞれの話者によってどのような動機づけが働いているかは相互に分かり合えるはずである。認知言語学的視点の導入により、言語教育においても、異質な言語の理解 (Einblicke in eine fremde Sprache) から、さらには国際レベルでのよりよい相互理解 (Verständnis für eine fremde Sprache/Kultur) への貢献が期待できよう。

【キーワード】 カテゴリー化, メタファー, イメージ・スキーマ, 視点, 参照点, 前景化と背景化, 主観的事態把握と客観的事態把握

1. 認知言語学の動向と現状

研究例:

レイコフ/ジョンソンのメタファー研究, フォコニエのメンタルスペース理論, フィルモアのフレーム意味論, レイコフの理想認知モデル, ラネカーの認知文法, タルミーの力動性 (フォース・ダイナミクス) による理論, ゴールドバーグの構文文法, etc.

学会の設立:

国際認知言語学会 (ICLA) 設立: 1989年

<http://www.cognitivelinguistics.org/>

日本認知言語学会 (JCLA) 設立: 2000年

<http://homepage2.nifty.com/jcla/>

ドイツ認知言語学会 (GCLA/DGKL) 設立: 2004年

<http://webapp.rrz.uni-hamburg.de/~DGKL/>

日本の Germanistik における認知言語学：

- 『ドイツ文学』第 104 号, 2000 年. 特集：認知言語学（岡本順治「認知言語学の潮流—背景と展開」, 野村泰幸「言語獲得のためのキュー」, 保坂靖人「生成文法研究とドイツ語研究の温度差」, 大矢俊明「認知意味論と中間構文」, 坂本真樹「再起構文の認知論的ネットワーク」, 竹内義晴「身体主義にもとづく, 主格の認知意味論」, 三瓶裕文「視点, 認知的距離, 心的態度」, 小川暁夫「機能類型論と認知言語学」)
- 『現代ドイツ言語学入門』（吉田・保坂・岡本・野村・小川共著）大修館, 2001. 第 4 章：認知言語論——ドイツ語における空間認識と移動（岡本順治）

「認知」とは？ — 人間などが外界にある対象を知覚した上で, それは何であるかを判断したり解釈したりする過程のこと。（ウィキペディア） → 意味が読みとられる過程

2. 「言語」と「認知」

2.1 「語彙」と「認知」

カテゴリー化

- 分類基準の<ひと>との関わり — 「薬草」「雑草」
- 文化的な相違 — 「アニ」「オトウト」と „Bruder“

プロトタイプ的な構成でのカテゴリー化

- Vogel: Spatz, Pinguin
【参考】ヘッジ表現 (Heckenausdrücke):
Der Pinguin ist *eigentlich* ein Vogel. – ?Der Spatz ist *eigentlich* ein Vogel.

メタファー

- 「人間」 → 「人間以外」: Tischbein
- 「空間」 → 「時間」: eine lange Strecke / Zeit
- 「具体」 → 「抽象」: spitze Bemerkung

イメージ・スキーマ

- Der Korb ist voller Kirschen. – Der Teller ist voller Nudeln. – Der Tisch ist voller Geschenke.
– Der Aufsatz ist voller Fehler. – Ich wünsche mir eine Woche voller Sonntage.

2.2 「文法」と「認知」

「視点」の取り方

- Anstieg – Abstieg

「参照点」の取り方

- der Schrank neben der Tür – die Tür neben dem Schrank

前景化と背景化

- Er wurde im Krieg getötet. – Er kam im Krieg um / ist im Krieg gefallen.
- Ich habe den Teller zerbrochen. – Der Teller ist mir zerbrochen.
- Sie haben etwas verloren. – Ihnen ist etwas runtergefallen.

類像性

- Er sieht ihr in die Augen. – Er schlägt ihr auf die Schulter. – Er wäscht ihr die Hände. – Er rasiert ihr den Kopf. – Er schlägt ihr die Schulter wund.

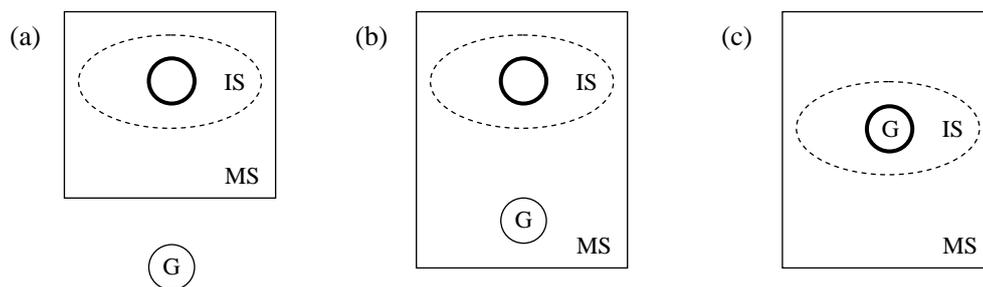
3. 事例研究——事態把握をめぐる日独対照研究

「主観的事態把握」(subjective construal) と「客観的事態把握」(objective construal) — 認知言語学的研究の流れの中で、近年とりわけ日本人研究者により盛んに論じられている話者の視点の取り方についての考え方 — vgl. Ikegami (2005), Uehara (2006), 本多 (2005)

主観的事態把握 話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように、体験的に事態把握をする（自己投入）。話者自身は認識の原点として言語化されず、暗示的なままにとどまる。

客観的事態把握 話者は問題の事態の外に自らの身を置き、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は——自分の分身をその事態の中に残したまま——自らはその事態から抜け出し、事態の外に身をおいて、傍観者ないし観察者として、客観的に——自己を含む——事態を把握する（自己分裂）。話者自身も明示的に言語化される。

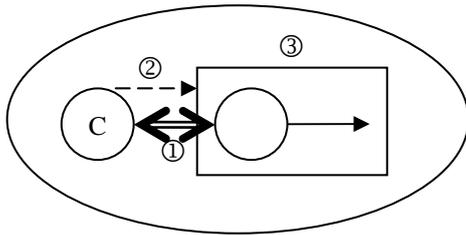
——池上 (2003-2004) に依拠



【図 1】 Langacker (1985, 1990) による主観化のモデル

- (2) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
b. Vanessa is sitting across the table from me.
c. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990: 17ff.)

I モード(認知のインタラクション・モード)

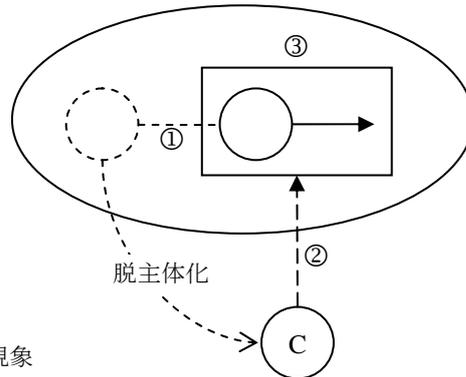


楢田: 認知の場

C: 認知主体

① インタラクション ② 認知プロセス ③ 捉えられる現象

D モード(外置の認知モード)



【図2】中村 (2004) による脱主体化 (脱主観化) のモデル

感覚表現

- (1) a. 山が見える。 „Ein Berg ist sichtbar/zu sehen.“
 b. Ich sehe einen/den Berg.

存在表現・所有表現

- (2) a. 今時間があります。 „Jetzt ist Zeit vorhanden.“
 b. Ich habe jetzt Zeit.

所在地の指示

- (3) a. ここはどこですか。 „Wo ist dieser Ort hier?“
 b. Wo bin ich (hier)? / Wo sind wir (hier)?

独り言

- (4) a. [Er] fügte hinzu: „Mir scheint, du faselst und bist nicht ganz klar im Kopf. [...]“
 (Th. Mann, *Der Zauberberg*)
 b. [彼は] 付け加えた。「うわ言をいったりして、頭がはっきりしていないような気がする。[...]」 (高橋義孝訳)

再帰代名詞

- (5) a. Ich wusch mich. (B. Schlink, *Der Vorleser*)
 b. ぼくは体を洗った。(松永美穂訳)
 (6) a. Sie hatte sich bei Tagesanbruch erhängt. (ebd.)
 b. 夜が明けるころに首を吊ったのだ。(ebd.)

直示

- (7) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。
 „Da ertönte hinten etwas wie ein leises Lachen.“ (村上春樹「海辺のカフカ」)
 b. Auf einmal ertönte hinter ihnen ein leises Lachen. (U. Gräfe 訳)

- (8) a. 彼女は [...] こちらに視線を向ける。 „Sie richtet den Blick hierher.“ (ebd.)
 b. [Sie] richtet ihren Blick auf mich. (ebd.)

認識のきっかけを表す従属文（「気づき」の表現）

- (9) a. ナカタさんが後ろを振り向くと、隣家の低いブロック塀の上に美しい細身のシャム猫が腰掛け、目を細めてこちらを見ていた。（村上春樹, ebd.)
 „Als Nakata sich umdrehte, saß auf der niedrigen Betonmauer des nächsten Hauses eine schöne schlanke Siamkatze...“
 b. Als Nakata sich umwandte, sah er auf der niedrigen Betonmauer vor dem angrenzenden Haus eine schöne schlanke Siamkatze, die mit zusammengekniffenen Augen zu ihnen herüberschaute. [...] (ebd.)

話法と時制

- (10) a. このうちに相違ないが、どこからは行っていいか、勝手口がなかった。
 (幸田文「流れる」)
 b. Es war zweifelsohne dieses Haus, aber mir war unklar, wie ich hineinkommen sollte, denn es gab keinen Hintereingang.
 c. „Es muß zweifelsohne dieses Haus sein. Wie soll ich da hineinkommen?“ Denn es gab keinen Hintereingang.

まとめ：自己を言語化しないで済ませる傾向の強い日本語（話者）と、自己を他者のように客体化し、言語化の対象とする傾向の強いドイツ語（話者）という対比で共通

※認知言語学の紹介については次の文献に大きく依拠しています。

池上嘉彦 (2006): 「認知言語学と日本語教育」北京日本学研究中心 (編)『日本学研究 16』学苑出版社, 45-53.

※事例研究部分の参考文献

Haiman, John (1995): „Grammatical Signs of the Divided Self“. In: Abraham, Werner et al. (eds.): *Discourse, Grammar and Typology*. Amsterdam: Benjamins, 213-134.

本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論——生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.

池上嘉彦 (2003-2004): 「言語における <主観性> と <客観性> の言語的指標 (1)-(2)」山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 3-4』ひつじ書房, 1-49; 1-60.

Ikegami, Yoshihiko (2005): „Indices of a ‘Subjectivity-prominent’ Language“. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3, 132-164.

Langacker, Ronald W. (1985): „Observations and Speculations on Subjectivity“. In: Haiman, John (ed.): *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: Benjamins, 109-150.

Langacker, Ronald W. (1990): „Subjectification“. *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.

中村芳久 (2004): 「主観性の言語学——主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編)『認知文法論 II』大修館書店, 3-51.

Uehara, Satoshi (2006): „Toward a Typology of Linguistic Subjectivity“. In: Athanasiadou, Angeliki et al. (eds.): *Subjectification*. Berlin: de Gruyter, 75-117.